

第十八回

薪

能



# 山崎八幡神社奉納

と き 平成25年9月28日(土) 【小雨決行】

と ころ 宍粟市山崎町 山崎八幡神社 能舞台

(台風等の不測の場合は宍粟市山崎文化会館)

第 一 部 宍粟市謡曲同好会 午後1時30分始

第 二 部 薪能奉納 午後5時00分始

主 催 山崎八幡神社薪能奉賛会

後 援 宍粟市・宍粟市山崎文化協会・宍粟市教育委員会・神戸新聞社・宍粟市商工会・しそく観光協会・龍野ロータリークラブ・山崎ライオンズクラブ・宍粟市医師会有志・宍粟市歯科医師会有志・新潮会有志・昭和会有志・平成会有志

協 賛 宍粟市謡曲同好会

**入場無料**

## 《 会 場 略 図 》



## 山崎八幡神社薪能奉賛会

事務局 宍粟市山崎町山崎386  
(神戸新聞山崎販売所 三谷新聞舗内)  
TEL (0790) 62-2266

## 第十八回 山崎薪能の開催にあたって

この度、第十八回目の薪能の奉賛が出来ます事、大変有難く、御協力を頂きました関係各位の熱意と努力によるものと厚く感謝いたします。

「謡曲十徳」一、行かずして名所を知る。二、旅にありて知音を得る。三、習わずして歌道を知る。四、望まずして高位と交わる。五、詠めずして花月を望む。六、老いずして古事を知る。七、友なくして閑居を慰む。八、觸れずして仏道を知る。九、恋せずして美人を思う。十、薬なくして鬱<sup>ウツ</sup>気を散ず。これは謡曲を習うことで沢山の良い事がありますよ、と言うことです。鑑賞して戴くだけでなく、更に謡曲の世界に一步を踏み込んで、斯道の繁栄に参加して下さい。

今年、上田先生を始めとして、重要無形文化財総合指定保持者の一流の諸先生方によって「能楽 咸陽宮」「狂言 鬼瓦」「能楽 鞍馬天狗」が上演されます。

又、それに先だって「宍粟市謡曲同好会」の皆様によって、日頃の成果が発表されます。この第一部もお稽古の程がしのばれて、仲々の聞きごたえのあるものと存じています。

是非共、お時間をつくっていただいで、この山崎八幡神社の能舞台にお出で下さり、幽玄の世界に身を沈めていただきます様祈念し、ご挨拶いたします。



山崎八幡神社薪能奉賛会

会長 安井克典

第一部 穴栗謡曲同好会番組

(午后一時三十分始)

一、素 謡・山崎篠謡会

嵐 山  
シテ 鳥越 茂 上田 博子  
ワキ 上田 隆雄 山崎きよ子  
ツレ 原 忠雄 原 みち代

二、連 吟・内山北露会

菊慈童  
秋武 春生  
伊藤 弘之  
梶浦 忠志

三、連 吟・池田掬水会

蝉 丸  
シテ 大部 満男 春名 一利  
ツレ 山田 雄三 柳田 薫  
伊野 操治

「花の都を立ち出て」より

四、連 吟・波賀翠謡会

俊 寛  
清水 康廣  
松本 繁信  
中田 勇

五、仕 舞・鶴崎観和会

玉 鬢 宗接久美子  
笹之段 春名 芳子 田中 洋子  
枕之段 山國 重代 鶴崎 和美  
阿 漕 永井由美子

六、独 吟・山崎福王会

藤 戸 葎谷 驍

八、連 吟・秋田泉謡会

土 蜘蛛 大前 弘司  
篠原 宗平  
中山 昌子

七、素 謡・山崎集杉会

花 月 三渡 圭介 村尾 裕 岸本 通哉  
クセヌキ 吉本 晃 井口 和榮 塚田 清一  
吉川 宏美 加藤 昭彦 中谷 裕子 三谷 恭三  
下村 弥 小泉 啓展

九、連 調・上田青耀会

土 蜘蛛 西尾 佳子  
垣口美穂子  
船弁慶 酒井 悦子  
大倉 純子

第二部 薪能奉納

(午後五時始め)

本日の能の解説 能楽協会神戸支部  
 修 被 山崎八幡神社宮司  
 能奉行舞台改め 薪能奉賛会副会長  
 根岸敬佑  
 笠田昭雄  
 鶴崎和美

観世流 能 楽

花陽夫人 大西礼久  
 侍女 今村哲朗  
 侍女 笠田祐樹  
 泰始皇帝 上田貴弘

咸陽宮

泰舞陽 松本義昭  
 荊軻 江崎敬三  
 大臣 和田英基  
 官人 丸石やすし

大鼓 辻 雅之 太鼓 上田 悟  
 小鼓 久田 陽春子 笛 齋藤 敦  
 上田 大介 上田 顕崇 藤谷 音彌  
 藤井 丈雄 笠田 昭雄  
 水田 雄晤 上田 拓司  
 松野 浩行 吉井 基晴

火入式

挨拶 薪能奉賛会会長 安井 克典  
 祝辞 宍粟市長 福元 晶三  
 祝辞 兵庫県議會議員 春名 哲夫

大蔵流 狂言

鬼瓦

大名 茂山 茂

太郎冠者 井口 竜也  
 後見 山下 守之

観世流 能 楽

花見 江崎 太郎  
 花見 水田 兼暉  
 花見 下村 あかり  
 花見 上月 大輔  
 花見 鶴崎 佑和  
 花見 三渡 健介  
 花見 三渡 大介  
 牛若丸 田中 誠士  
 山伏・天狗 杉浦 豊彦

鞍馬天狗

白頭

東谷の僧 江崎 金治郎

大鼓 辻 芳昭 太鼓 上田 悟  
 小鼓 久田 舜一郎 笛 齋藤 敦

能力 丸石 やすし  
 木葉天狗 茂山 茂 松野 浩行 今村 哲朗 藤谷 音彌  
 木葉天狗 井口 竜也 大西 礼久 齋藤 信輔 吉井 基晴  
 木葉天狗 山下 守之 寺澤 幸祐 上田 大介

附祝言

閉会の辞

薪能奉賛会副会長

鶴崎 和美

(終了予定 午後八時頃)

※会場内での写真撮影・録画・録音は、堅くお断わりいたします。  
 また携帯電話の電源はお切りください。

## お祝いのことば



宍粟市長 福元 晶三

「山崎薪能」開催の季節を迎えますと、宍粟に初秋が訪れたことを実感いたします。「第十回 薪能」の盛会を心よりお祝い申し上げます。

由緒ある山崎八幡神社能舞台で披露されるこの薪能も十八回目を迎えられ、今では地域の伝統文化として定着しております。これもひとえに、山崎八幡神社薪能奉賛会の皆様をはじめ、関係各位の永年のご尽力の賜物と深く敬意と感謝を申し上げます。

さて、能の源流は平安時代まで遡るともいわれるほど古く、上演形態が変化することなく現代まで伝わる伝統芸能を象徴するものです。これほど永きに亘り、人々を魅了し続けてきた能の魅力とは何なのでしょうか。

能は、情緒思考の芸術であるといわれています。情緒とは、脳に直接的な刺激がなく、脳が休んだ状態で起こる微妙な感情であり、特殊な雰囲気によって引き起こされます。

一方、西洋芸術の多くは、知性や美学といった脳に直接的に刺激を与えるもので、頭で理解する論理思考の芸術といえます。この様に、同じ芸術でも情緒と論理で分かれば、日本人は古来より情緒を大事にしています。世界的にみても、情緒を楽しむ文化を持つのは日本だけであるといわれています。しかし、目まぐるしく変化する現代社会において、情緒に触れる機会が少なくなってきたのも事実です。

能を楽しむ、それは私たちが普段忘れかけている感覚を呼び起こし、日本人であることを再認識させてくれることなのかもしれません。

華麗な装束に身を包んだシテ方やワキ方が、謡と囃子に乗って演じる舞には、無表情なはずの能面に幾つもの表情が演出されます。そんな幽玄の世界に今宵はゆっくり身を委ねたいと思います。

宍粟市は個性的な文化を育むまちをめざしています。今後とも、山崎八幡神社薪能奉賛会の皆様を中心に、この素晴らしい伝統芸能が継承・発展されますことを心よりご祈念申し上げます。結びに、お集まりの皆様、関係各位のご健勝とご活躍を願いお祝いのご挨拶いたします。

## お祝いのことば



兵庫県議会議員 春名 哲夫

夜風の冷たさに秋を感じる今日、「第十八回山崎八幡神社薪能」が盛大に開催されることを心からお祝い申し上げます。

薪能の起源は平安時代中期にまで遡り、奈良の興福寺で行われたものが最初だといわれます。本来、それは神事・仏事の神聖な儀式であり、神社・仏閣の厳肅な空気の中、かがり火が照らし出す能の世界観は視覚・聴覚を刺激し、見る者の想像力を掻き立てる独特のエンターテインメントとしての魅力を持っております。

勇壮な歌舞や謡、囃子、そして様々な表情を見せる能面といった非日常的な要素が織り成す幽玄の世界は、一つの楽しみ方を強制するものではなく、目に映る情景や聞こえてくる優美な音をもとに見る人の解釈の数だけの楽しみ方を生み出し、また、その全てを受け入れるほどの深みがあります。

世界では多様な文化がひしめき、日々新しい形を持つ芸術や文化が生み出されていく中、数百年もの間ほとんど形を変えることなく受け継がれている能は、世界的に見ても稀有な例だといえるでしょう。

このような日本が誇る古典芸能を地元・山崎で楽しむことが出来るのは、ひとえに山崎八幡神社薪能奉賛会の皆様をはじめ、関係者の皆様の熱意とご尽力の賜物であり、改めて敬意を表し感謝を申し上げます。

今後とも山崎八幡神社薪能奉賛会の益々のご発展とご活躍を強く願い、また、お集まりの皆様のご健勝とご多幸を祈念して、私のお祝いの言葉といたします。

# 演目解説

観世流

## 能楽 咸陽宮

秦の始皇帝はかねてより「燕の国の地図と叛将の樊於期（はんおき）の首を持参した者には、何事であれ望みを叶える」という宣言を出していました。

このチャンスを利用して、始皇帝を討とうと考えた燕国の荊軻（けいあ）と秦舞陽（しんぶよう）は「恩賞のかけられている品を持参した」と言っ、咸陽宮にやってきたのでした。

参内を許された二人は、慣例に従って佩剣を官人に預け、始皇帝の前に進み出て、まず秦舞陽が樊於期の首を献上します。続いて荊軻も地図の箱を捧げます。

この時、始皇帝は箱の底に隠してあった剣の光に気づいて逃げようとはしますが、捕らえられてしまいました。剣を突きつけられた始皇帝は「今生の名残に、花陽夫人の琴の音を聞きたい」と所望し、荊軻はこれを許します。

花陽夫人は「七尺の屏風は、躍らば越えつべし」と琴の歌詞に託して、脱出する手立てを知らせます。

それを聞いた始皇帝は、琴の音に酔いしれている二人の隙を窺い、袖を引きちぎって屏風を乗り越えて逃げるこ

とができました。荊軻はあわてて剣を投げつけましたが、柱にあたり、皇帝を討ち取ることはできず、逆に二人は討ち取られ、秦の御代は栄えたのでした。



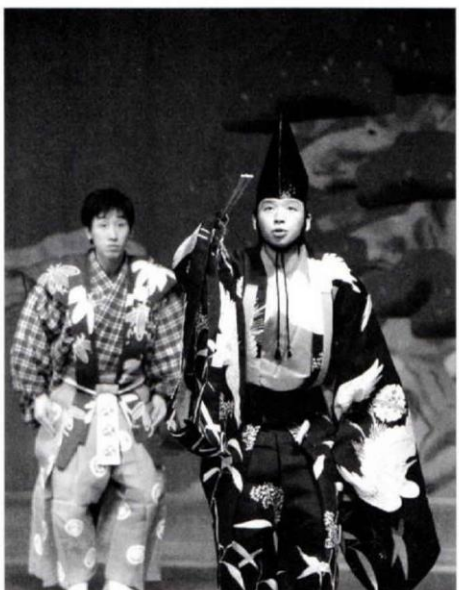
## 大蔵流

## 狂言 鬼瓦

裁判のため、長期に渡り京都に単身赴任の遠国の大名が、訴訟に勝ち、そのお礼お別れのため、五条の因幡堂のお薬師如来に太郎冠者を連れ立って参詣します。

今回の勝訴も、このお薬師如来のお蔭と感謝し、国許へ帰ってこの御堂を移し安置することにしました。二人は、姿の良い御堂の隅々を見てまわります。ふと、大屋根を見ると、威めしい鬼瓦が、目にとまりました。ところが、どうも大名には国許に残した女房の面にソツクリに見えるのでした。

鬼瓦が妻とそっくりだと言いつつも、妻を思い出し早く会いたいと、大泣きをする大名が、なんととも狂言的で、小品ながら演者にとっては、無類の難曲とされています。



観世流

## 能楽 鞍馬天狗

春の京都、鞍馬山。ひとりの山伏が、花見の宴のあることを聞きつけ、見物に行きます。稚児を伴った鞍馬寺の僧たちが、花見の宴を楽しんでいると、その場に先の山伏が居合わせていたことがわかります。場違いな者の同席を嫌がった僧たちは、ひとりの稚児を残して去ります。

僧たちの狭量さを嘆く山伏に、その稚児が優しく声を

かけてきました。華やかな稚児に恋心を抱いた山伏は、稚児が源義朝の子、沙那王「牛若丸」であると察します。ほかの稚児は皆、今を時めく平家一門で大事にされ、自分はないがしろにされているという牛若丸に、山伏は同情を禁じ得ません。近隣の花見の名所を見せるなどして、牛若丸を慰めます。その後、山伏は鞍馬山の天狗であると正体を明かし、兵法を伝授するゆえ、驕る平家を滅ぼすよう勧め、再会を約束して、姿を消します。

大天狗のもと武芸に励む牛若丸は、師匠の許しがな

いからと、木の葉天狗との立ち合いを思い留まります。そこに大天狗が威厳に満ちた堂々たる姿を現します。

大天狗は、牛若丸の態度を褒め、同じように師匠に誠心誠意仕え、兵法の奥義を伝授された、漢の張良（ちやうりよう）の故事を語り聞かせます。そして兵法の秘伝を残りなく伝えると、牛若丸に別れを告げます。袂に縋る牛

若丸に、将来の平家一門との戦いで必ず力になろうと約束し、大天狗は、夕闇の鞍馬山を翔け、飛び去ります。



演者紹介

シテ方(親世流)

上田 貴弘  
杉浦 豊彦  
笠田 稔司  
上田 拓雄  
笠田 昭雄  
吉井 基晴  
大西 礼久  
上田 大介  
藤谷 音彌  
寺澤 幸祐  
松野 浩行  
水野 雄悟  
齊藤 信輔  
今村 哲朗  
藤井 丈雄  
笠田 祐樹  
上田 誠士  
田中 誠士

上田家当主 重要無形文化財総合指定保持者  
重要無形文化財総合指定保持者  
重要無形文化財総合指定保持者  
重要無形文化財総合指定保持者  
重要無形文化財総合指定保持者  
重要無形文化財総合指定保持者  
重要無形文化財総合指定保持者  
重要無形文化財総合指定保持者  
重要無形文化財総合指定保持者  
重要無形文化財総合指定保持者

神戸在  
京都在  
神戸在  
西宮在  
神戸在  
西宮在  
川西在  
豊中在  
神戸在  
西宮在  
京都在  
大阪在  
堺在  
大阪在  
神戸在  
神戸在  
大阪在

子方

田中 誠士  
下村 あかり  
上月 大輔  
鶴崎 佑和  
三三 健介  
三三 渡介

大阪在  
大阪在  
大阪在  
大阪在  
大阪在  
大阪在  
大阪在

水田 兼暉  
江崎 太郎

大阪在  
姫路在

ワキ方

江崎 福王流 金治郎  
江崎 敬三  
和田 英基  
松本 義昭

江崎家当主 重要無形文化財総合指定保持者

姫路在  
姫路在  
赤穂在

狂言方

大蔵流 茂山 茂  
丸石 やすし  
井口 竜也  
山下 守之

重要無形文化財総合指定保持者

京都在  
京都在  
京都在

囃子方

小鼓方 大倉流 舜一郎  
久田 陽春子

重要無形文化財総合指定保持者

西宮在  
西宮在

大鼓方

大倉流 芳昭  
辻 雅之

重要無形文化財総合指定保持者

阪南在  
阪南在

太鼓方

金春流 悟

重要無形文化財総合指定保持者

和泉在

笛方

森田流 敦

大阪在

八幡神社奉納新能の記録

回	年月日	1	2	3	4	5	6
年月日	昭和 55・10・4	56・10・24	58・10・1	60・10・5	62・9・26	平成 1・9・16	
演目	観世流 羽衣 江上田照也 江崎金治郎	観世流 鉢木 江上田照也 江崎金治郎	観世流 三井寺 浦田保利 江崎正左衛門	観世流 弱法師 杉浦元三郎 江崎正左衛門	観世流 翁 面箱松本薫 三番叟茂山千五郎 千才観世清和	観世流 菊慈童 吉井順一 江崎金治郎	
演目	狂言 柿山伏 茂山千五郎 茂山正義	狂言 瓜盗人 茂山正義 茂山あきら	狂言 水掛罨 茂山あきら 茂山千五郎	狂言 昆布売 伊藤忠三郎 茂	狂言 二人袴 茂山千三郎 松本千五郎 木村薫	狂言 呼声 茂山千之丞 茂山あきら 丸石やすし	
演目	観世流 土蜘蛛 江杉浦元三郎 江崎康雄	観世流 紅葉狩 江杉浦元三郎 江崎康雄	観世流 小鍛冶 江大西智久 江崎金治郎	観世流 葵上 江大西智久 江崎金治郎	観世流 狸々乱 江藤西智久 江崎金治郎	観世流 石橋 上藤田拓三 中村彌三郎	

7	8	9	10	11	12
3・9・21	5・9・11	7・9・2	9・9・6	11・9・4	13・9・1
観世流 経正 大西智久 指吸雅之助	観世流 鶴亀 井上嘉久 指吸雅之助	観世流 吉野天人 坂口信男 江崎金治郎	観世流 安宅 大西智久 江崎金治郎	観世流 高砂 杉浦豊彦 江崎敬三	観世流 巻絹 笠田昭雄 上田貴弘 和田英基
狂言 瓜盗人 茂山正義 綱谷正美	狂言 口真似 茂山真吾 丸石やすし 木村正雄	狂言 蝸牛 善竹忠重 高井秀規 阿草一徳	狂言 素袍落 茂山千作 茂山七五三 茂山千五郎	狂言 萩大名 茂山千作 茂山千五郎 松本薫	狂言 寝音曲 茂山千作 茂山千五郎
観世流 安達原 藤井徳三 江崎金治郎	観世流 土蜘蛛 藤井徳三 江崎金治郎	観世流 野守 波多野晋 中村彌三郎	観世流 岩船 上田貴弘 江崎敬三	観世流 井筒 大槻文蔵 江崎金治郎	観世流 俊寛 武富康之 上田拓司 大槻文蔵 江崎金治郎



祝

薪

能

ご協賛者ご芳名

宍粟市山崎文化協会様 藤井慧乗様  
 宍粟市商工会様 伊野操治様  
 龍野ロータリークラブ様 栗山章様  
 山崎ライオンズクラブ様 篠原宗平様  
 鹿島建設株式会社様 (株)竹川鉄工所・竹川光郎様  
 兵庫県神社庁宍粟支部様 波賀翠謡会様  
 江崎福王会様 中谷裕子様  
 新宮福王会様 吉本商店様  
 姫路薪能奉賛会様

※八幡神社奉納の第十八回薪能の開催に当りまして、いつもながら格別の御理解、御協力を賜わり、厚く御礼申し上げます。なお、折角の御厚意にも拘らず、日程等の都合もあり、十分な打合せもできませず、広告記事に不備が多々ある事と存じます。また、編集後に戴いた分が掲載洩れになっていたりすることもあります。この点悪しからずお許しのほどお願い申し上げます。

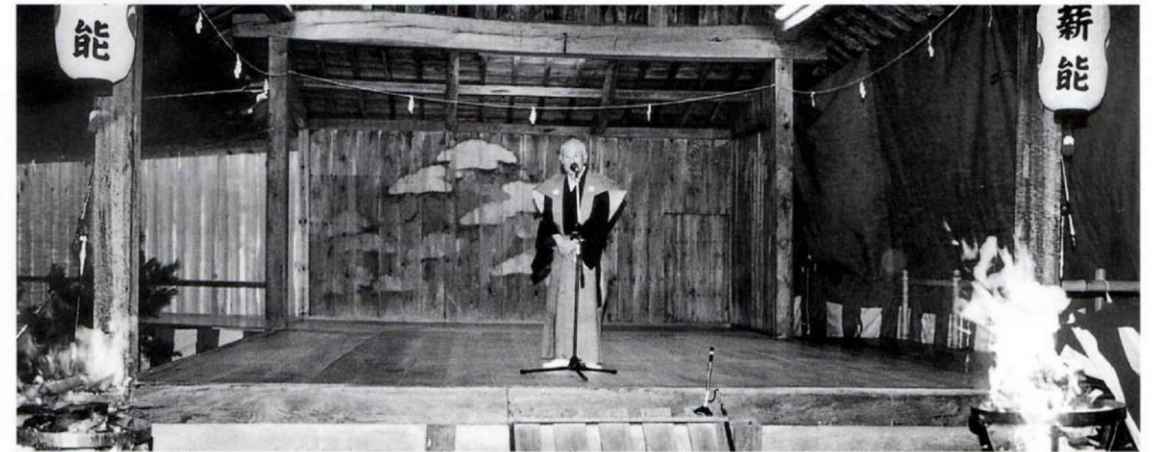
17	16	15	14	13
23 ・ 9 ・ 3	21 ・ 9 ・ 5	19 ・ 9 ・ 1	17 ・ 9 ・ 3	15 ・ 9 ・ 6
千手 <small>観世流</small> 江大 崎西 敬礼 三久	杜若 <small>観世流</small> 江大 崎西 金礼 治久 郎久	西王母 <small>観世流</small> 江井 崎上 金裕 治久 郎久	張良 <small>観世流</small> 江藤 崎井 敬徳 三三	藤戸 <small>観世流</small> 江杉 崎浦 金元 治三 郎三
寝音曲 <small>狂言</small> 茂山 正千 邦五 郎	魚説経 <small>狂言</small> 茂山 千千 三五 郎郎	伯母ケ酒 <small>狂言</small> 茂山 七千 五五 三郎	貫智 <small>狂言</small> 茂山 千千 五五 郎郎	伯母ケ酒 <small>狂言</small> 茂山 佐々 木千 千五 郎郎
融 <small>観世流</small> 江杉 崎浦 金豊 治彦 郎彦	雷電 <small>観世流</small> 江杉 崎浦 敬豊 三彦 彦	正尊 <small>観世流</small> 江大 崎西 敬智 三久 三	船弁慶 <small>観世流</small> 江杉 崎浦 金豊 治彦 郎彦	殺生石 <small>観世流</small> 是杉 川浦 正豊 彦彦

# 謡曲十徳

謡曲を通して得ることが出来る効能をご紹介します。

- 一、行かずして名所を知る
- 二、旅にありて知音を得る
- 三、習わずして歌道を知る
- 四、望まずして高位と交わる
- 五、詠めずして花月を望む
- 六、老いずして古事を知る
- 七、友なくして閑居を慰む
- 八、觸れずして仏道を知る
- 九、恋せずして美人を思う
- 十、薬なくして鬱気を散ず

- ・現代病と云われる鬱気を晴らし、ストレスを解消する
- ・肺機能を高め、咽喉を強める
- ・食欲が増進し、胃腸の働きを活発にする
- ・集中力を養い、脳の働きを増進する（老化防止）
- ・自ずから礼節を身につけ良識を得る
- ・温故知新、文学、歴史を学び知識と新しき発想を得る
- ・孤独をも慰め、広く知己を得る
- ・美しき日本語に接すると共に、発音は正確、美声となる
- ・芸術の深さを識り、感性に富んだ美を追求し表現する
- ・現実の世界を離れ、中世における演歌とも云える謡曲を吟ずる



当舞台に於いて旧くは山崎藩主本多公の奉納薪能又、昭和55年より平成23年にかけて奉賛会による薪能が17回にわたり開催されました。

300年余の風雪にたえて尚建立時のたたずまいを十分にしのばれる長い歴史をもった由緒ある舞台でしたが、老朽化が著しく、平成19年に大改修工事を施した結果、新装なった舞台は入母屋造り、3間四方の本舞台に後座・地謡座・橋掛りを備え、鏡の間を兼ねた約18坪の楽屋を併設するものです。

## 【お知らせ】

山崎八幡神社薪能奉賛会を支える穴栗市謡曲同好会では、謡曲・仕舞の稽古を各社中で行なっております。稽古をご希望の方はご連絡下さい。初心者大歓迎。見学だけでも結構です。

### 連絡先

山崎福王会	山崎篠謡会	山崎集杉会	波賀翠謡会	鶴崎観和会	内山北露会	池田掬水会	秋田泉謡会
葎谷 驍	原 忠雄	塚田 清一	松本 繁信	鶴崎 和美	内山 正作	伊野 操治	篠原 宗平
六二二七四六	六二二八七九	六二一〇〇六一	七五二四九三	六二一〇一四七	七四一〇〇二三	六二一六〇〇	七二一三八二

(五十音順)